

『釈摩訶衍論』に説かれる六無明の真意

島 村 大 心

1 序

『釈論』は、8 世紀、東アジア文明圏で成立したといわれる作者不詳の、後世真言宗に影響を与えた・『起信論』の注釈書である。それは大 32-623a4a で、①明②闇③俱是④俱非⑤空⑥具足なる六無明を説き、これらを、煩惱即菩提＝無明即明の原理によって、明の内実として明らかにしている。これを解明することは、仏教真理の理解に資する処大である。このうち②闇は、一般に云う無明で、④俱非は、〈無明即明なる真如は、明・無明という言葉では俱に表せない(非)〉(「言説の依無し」という離言真如のこと、⑤空は、〈空(悟り・真如)に於いては、自性あるものとしての体と作用、が成り立たないこと〉(「体用なければ即ち空なり」)である。⑥具足は〈『摂大乘論』の説く染淨二分依他性に対して無明が熏習し、識別作用、認識対象、認識主体の三者が成立すること〉(「根本無明は、能く一切の染法と淨法とを生じて増長せしめるが故に、[一切法を]具足する[もの]と名づける」)で、『起信論』の説である。これらの更に詳しい説明は、別の機会を待ち、本稿では、残された①明と、③俱是を解明するにとどめる。

2 ①明としての無明

これは〈無明即ち明〉(＝煩惱即菩提の変形)とする・大乘經典に頻出する命題で、この意味を『釈論』は「無の五義」と「明の五義」に分けて説明する。

先ず「無の五義」とは、下記の高崎の真如理解に従えば、現象界の有り方(①「無余」③「周遍」④「円満」——これらが無とされる理由については、『釈論』は何ら説明しないが、これらの三者の語義から〈一切の制約・限界の無いこと、一切が無相であることの「無」と推定される)なのであって、それは②「究竟」＝真如なのであり、そこでは、全ての事象が〈無自性＝一相＝無相＝⑤「平等」〉としてあり、これを覚ることが根本無分別智・般若波羅蜜多・すなわち最高の悟り(究竟覺)なのであ

る 623a. ここで、③「周遍」とは、真如が現象界の全てに行き渡っている、との意味であろうが、これは真如を存在論的に表現したものである。真如の意味を確定するには、経論から可能な限りの用例を集めた上での詳細な文献学的検討作業を要するが、本稿では暫定的に、高崎が提示した真如概念即ち、〈全て (法) が存在している・そのあるがままの姿・あり方〉(「真如 tathatā は、そのようなこと、より正確に言えば、真実あるごとく yathābhūtam そのとおり tathā あることで、諸法の法性 dharmāṇām dharmaṭā, 諸法の真実のありかた tattvasya lakṣaṇam, 乃至、真実それ自体 tattva とも言われ、われわれ凡夫の誤った見を離れ、仏の智慧によって見られたものの姿、あり方をいう。」高崎¹⁾)によって理解することとする。これに依れば真如とは、〈仏眼に映じている・全ての現象界の真実としてのあり方〉なのであって、そこでは〈あるものは真如であり、あるものは真如ではない〉といった状況はなく、仏眼には〈全ての事象があるがままに (=真如として) 映じている〉という事態であろう。換言すれば、〈全ての事象が無自性なるままに、無相・平等＝空、なる事態〉として覚者に見えている・〈そのあり方〉を真如と言っているのである。このあり方は、〈仏眼に写る・無制限なる・全ての事象のあり方〉なのであるから、「周遍」と表現されているのであろう。この真如概念に従えば、「周遍」とは〈真如なる・何かの実体物があって、それが万物に行き渡っている〉、という文字通りの意味ではないこととなる。

次に、明の五義とは、①真如が全てに「通達」(上記の③周遍④円満と同一)しており、②覚者の眼に〈全ての現象界のありのままのあり方＝真如、が明瞭に曇り無く映じていること〉(「顕了」)、③覚者が、〈空なる智慧・般若波羅蜜多・根本無分別智・三無性なる智慧＝真実性、によって、現象界全てのありのままのあり方 (=真如) を、そのままに観ていること〉(「観照」)—①②は、事物の側からの説明であったが、これは覚者の智慧の側からの説明、④〈全ての事物がありのままに覚者の眼に現われている (見えている) こと〉(「現前」)—②③と同内容だが、認識対象としての〈事物のありのままのあり方〉の側からの説明、⑤「無礙」のこと——華嚴教学においては、種々に無礙を説くが、ここでは明の内実であるから、覚者の智としての無礙智すなわち上記③の意味、と理解してよいのではあるまいか。

以上を要すれば、ここには、現象界の事象のあるがままのあり方からの説明と、覚者の智がそれを認識する側からの説明、の二種類が認められるが、そこでの事態としては、上記の合計十の説明は全同なる認識論的事態であって、『釈論』623b は、「無明の字は尽く一切の般若の智明を摂し、具足円満して闕失するとこ

ろ無し」（無明即明）、「円満般若の日は、法界に周遍して、明にあらざること無し」（一切の俗諦の法は明である）と説く。

3 ③俱是なる無明

これは、「染と浄の二局面として成立する無明（＝明）」であり、『釈論』619aの云う望別決斷、即ち〈無明即明というただ一種類としてしかない無明（＝明）が・已覚者と未覚者との相違によって・夫々明（智慧の光）と闇〔なる無明〕として現われるのだ〉、という二面性をもつことを意味する。これは、思うに、『撰大乘論』の説く染浄二分依他性²⁾（衆生の心）の説明そのものであって、ここでは次の二つの喩で説明されている。①極闇の夜に迦羅鳩奢那と人間の二者が同じ場所にいて、この闇を見る時、前者は清浄光明なる色を見、後者は黒闇の色を見る。②〈根本無明は、幻人の中には能く幻質を作し、徳人の中には能く、徳質を為す。一を取るべからず。一に非ざるが故なり〉。この②に述べられる意味はやや分かり難いが次の如き意味であろう。即ち根本無明は、已覚者（徳人）にとっては明・悟りなのであって、そこでは全ての現象界の事象は悟り・真如として現われている（「徳質を作す」）。一方、幻術に惑わされている凡夫（幻人）は、〈真実には自性あるものとしては存在していない事物を、自性ある存在物として顛倒に認識し、それに執着している〉のである（「幻質を作す」）。このように、染浄二分依他性は、已覚者・未覚者の区別に応じて、明と無明との二極面に転換するものであるから、どちらか一方のみを正しいとしてはならない。この両局面を備えたもの（「非一」）なのであって、無明即明なる染浄二分依他性は、「事」が両局面として成立する（「俱是」）・もとのものなのである。

4 結語

以上見てきたように、『釈論』は六無明によって、悟り・真如の内実³⁾であるところの・〈平等・無相なる空（①明なる無明）、無明即明（③俱是なる無明）、染浄二分依他性等・無明即明を説明する原理（③俱是なる無明）〉、を中心として説明し、これに加えて、〈離言真如（④俱非なる無明）、無作用性（⑤空なる無明、⑥具足なる無明）、俗諦の発生根拠としての無明（②闇、⑥具足の無明）〉等、豊富な内容を説いている。しかし、ここでは、悟り・真如における〈能所識の滅なる事態、「雜乱」なる事態、一行者成仏便一切衆生成仏、真如の実有、後得智による利他行、無時間、因果律の不成立、無空間、数量の無〉等は説かれず、これらの多くは、

『釈論』の他所で詳しく説かれている点には留意すべきである。尚、本稿とは違った角度から、『釈論』の無明を早川道雄「『釈摩訶衍論』における無明解釈の特徴」『国際仏教学大学院大学紀要』第2号が論じている。

- 1) 高崎直道訳『宝性論』講談社 1989 年 398 ページ
- 2) 「唯識思想成立の根拠と染浄二分依他性・転依」『智山学报』第 69 号参照
- 3) 以下の真如の内実については、「大乘仏教の発見した真理の内実」印度学仏教学研究 第 53 巻第 55 回学術大会紀要、及びこれを加筆した・拙論「般若心経の説く空の内実 —『八千頌般若経』による解説」豊山教学大会紀要第 33 号平成 17 年「附」参照

〈キーワード〉 無明即明、煩惱即菩提、空、真如、二分依他性、真如隨縁

(国際仏教学大学院大学 研究生)

新刊案内

財団法人 仏教伝道協会 英訳大蔵経翻訳叢書

APOCRYPHAL SCRIPTURES

- i) *The Bequeathed Teaching Sutra* (佛垂般涅槃略説教誡經 Taishō 389)
Translated by J.C. Clearly
- ii) *The Ullambana Sutra* (盂蘭盆經 Taishō 685)
Translated by BANDO Shōjun
- iii) *The Sutra of Forty - two Sections* (四十二章經 Taishō 784)
Translated by Heng-ohing Shih
- iv) *The Sutra of Perfect Enlightenment* (大方廣圓覺修多羅藏經 Taishō 842)
Translated by Peter N. Gregory
- v) *The Sutra on the Profundity of Filial Love* (父母恩正經 Taishō 2887)
Translated by ARAI Keiyo

B5 変形版 定価 4,000 円

cuss the “*zhaihui*” service and the “*jiangjing*” assembly, piece together and reconstruct the development of the “*zhaijiang*” usage throughout Chinese Buddhist history.

90. The true meaning of six “Non-enlightenments” in the *Shi-moheyan lun*

Daishin SHIMAMURA

91. On “self ordination” in the *Fanwang jing*

Kyung-mi IM

One characteristic of Mahāyāna bodhisattva precepts is the idea of “self-ordination”. In the case where one has no teacher, self ordination means vowing to keep the Buddhist precepts personally. Although in self ordination the spiritual aspect is stressed, there also need to be certain conditions for it to take place. This characteristic is explained in the idea of “visionary experience”, found in the 23rd precept of the *Fanwang jing*. This essay examines the influence of selfordination as found in the *Fanwang jing*, taking into account the *Huayan jing* and the point of view of practice.

Visionary experience is built up through practice. In this way, the visionary experience is based on practice, and the person who completes “self ordination” follows the influence of the *Huayan jing* in the *Fanwang jing*, hence bodhisattva non-regression is necessary for visionary experience. The disciple of the Buddha is penitent, practices and sees the visionary experience as proof of ordination. Accordingly, the visionary experience found in “self ordination” of the *Fanwang jing* should be understood from the point of view of practice.

92. Research on the Meditation on the Lotus Sūtra (法華三昧) in the *Tiantai sijiao yi* (天台四教儀)

Chong-nam KIM